

## ESSAY

都市景観賞と同時に募集した「福岡市景観エッセー」。今年「人に教えたい身近な景観」をテーマに募集。73作品の力作の中から、4作品が選考されました。



9

21世紀も  
このままでいて欲しいお地蔵さん

伊藤 誠一郎 Seichiro ITO  
福岡県春日市

通りから一步入れれば地蔵様がびっしり並ぶ広い境内。門前にも昭和初期の雰囲気漂う。筆者の60余年にわたる定点観測的感覚と、行ってみたいくなる細やかな描写が際立っている。時代に翻弄される庶民の姿が愛しい。

(選考委員 永崎 明子)



私が、このお地蔵さんと出会ったのは、昭和14年春のことである。福岡市内の中学校受験の合格祈願のため、母親が2月の凍てつく早朝に素足でお百度を踏んでくれたのである。合格した後、父親からそのことを聞き、母親の愛情に感謝してお礼のお参りに来た思い出がある。

旧大学通り(現在千代町4丁目)の九大医学部正門を西へ200m程行くと「旭地蔵大菩薩」の石柱が目に入る。その側の名物饅頭屋の間を横道に曲がると、正面にデント、素朴ながら堂々とした崇福寺の山門が姿を現す。この山門は大正7年に福岡城本丸表門を移築したもの。興重文指定

地蔵尊の本堂はこの境内の片隅に、参拝者を温かく包むようにひっそりと佇み、堂内には線香と、ろうそくの明かりが絶えることがない。この「旭地蔵大菩薩」は、自分で3・7・21日など参拝日を決めてお参りすることから「日切り地蔵さん」の愛称で呼ばれて親しまれている。山門の前には、参拝者にお供物を売る店が、3軒並んでいる。年配の女性が店番している一軒に寄り線香などを求める。並べてある絵馬の図柄が何とも時代離れしているので尋ねると、

80歳を過ぎたお婆さんが描き続けているそう、九大受験絵馬は「角帽姿の帝大さん」である。

また、この3軒の店は昭和10年頃の木造建で、建物の一部を除いては当時のままを使用しているとのこと、年月を経た重みと温かさを感じるのも成る程と思われた。

福岡空襲にも被災せず、都会の中にも切り取ったような一区画。今風な飾りや商業主義を嫌い、古き好き物を大切に維持して来たこの場所を訪れる参拝者は、親から子供、孫と若者まで続き市内県内は勿論、遠く関西からもあるという。

立秋を過ぎた一日。蝉しぐれを聞く崇福寺の境内。樹々の緑陰を流れる爽やかな風。掃き清められた掃目。本堂回りの無数の小さな地蔵群。たなびく線香の香りに心が和む。

悩み多い現代社会。豊かさの中の心の貧しさ。「日切り地蔵さん」を囲むこの空間は、長い歲月、多くの人々に、心の安らぎを与え続けている。

今でも早朝から、お百度を踏む。人が絶えないということである。ふかしたての、美味しそうな饅頭を土産に買って帰る。